

男性向けの非暴力についてのグループワークをすすめる際に、いろんなことに配慮している。特に、「私たちは誰か」と自問自答することが多い。暴力加害者は「動機づけられていないクライアント」としてみえるが、その彼らとの作業同盟(治療同盟therapeutic alliance)という言葉よりも、作業同盟working allianceという言葉の方がなじむ)の組み方が課題となるからである。プログラムをすすめるファシリテーターの男性の

「あなたと同じように男性としての私たちも暴力文化という環境のなかを生きてきた」という自線の共有が信頼関係をつくる。

そうした当事者の視点の保持は、グループワークの基調を成す。共に内面化してきた、そしてい

まもそこに生きる「支配的な男性性の物語」をいかにして共に書き換えていくのが課題になると思う。私が依拠するものの一つである「ナラティブ・アプローチ」が、支配的なストーリーから対案的なストーリーへの書き換え作業を援助するということにも着想を得たアプローチである。集合的に抱かれている男性性という意味では対象を心理社会的な相において設定すべきだということになる。

集合的な男性性という課題を含んでグループワークの内容を構成し、実施する場合、まず第1に、男性の援助者自身が肯定的なグループ体験をしていることが重要となる。家族、職場という身近な小集団のなかにおいてである。自己肯定

と他者肯定の双方に関して、集団における体験が大切となる。

第2に、脱暴力の課題は、男性にとつての親密さ形成ということの応用問題を成しているといえる。男性性にとつての親密さは両義的である。とくに男性同士の親密さは、「ホモフォビア」という「不安心理」との格闘となる。これは集合心理の典型である。同性同士の親密さへの欲望を制御する心理的な磁場のようにして「ホモフォビア」は作用する。

同性同士の親密さへの欲望(ホモエロス)をホモセクシャルとして観念させないようにして、社交化された男性同盟としての「ホモソシアル」なものが生成し、距離を縮めるための「関係性装置」となつて機能している。友情、同僚や同士、戦友、ライバル、競争心などとして観念されるものであり、そのための儀礼的制度的な基盤や制度(スポーツ、業績主義、祭りなど)は社会のなかに数多くある。だから非暴力グループワークの際の作業同盟がこのホモソシアルな場になつていく可能性のある点には注意が要る。

第3に、男性とのグループワークでは、「男らしさの鎧」がバリアのように作用していることに配慮する必要がある。グループでは暴力の体験を語ることを重視しているが、その記憶の内容、想起の仕方、語る言葉づかいと語彙、体験を言葉にする際の文脈、主語の不明確さ、感情と言葉の不一致など、暴力という行動をめぐる認知、感情、言葉の特質がみえてくる。それを語るナラティブのラインに、既存の男らしさの物語が重なる。自らの体験としての暴力を正確に再構成し、事実記述し、謝罪をおこなうまでには自分の力だけでは困難が多い。「失感情的な心象」ともいえるほどの男性心理を再著述するためには、なんらかの援助の場が要る。

こうしたことを踏まえると、その格好の場として暴力加害への「心理社会的アプローチ」による脱暴力プログラムがあると考えている。

立命館大学教授 中村 正

暴力を振るう加害者たちとともに―― グループワークやカウンセリングをして考えたこと

※この文章は「『暴力と男性(性)』をめぐる心理教育プログラム―社会臨床的アプローチと心理社会的な視点―」(『現代のエスプリ』、第484号、特集「男女共生社会をめざす心理教育」、至文堂、2007年10月)の一部です。